論文の内容の要旨

論文題目　江戸化物の研究―草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開

氏名　　カバット　アダム　アイラ

草双紙の中の化物（創作化物）はどのように形成されたのか。そして、草双紙の変遷に伴い、どのように展開されたのか。化物を主体とする草双紙（化物尽くし）の内容と体裁は草双紙の出版事情とどのような関わりを持ったのか。これらの問題を明らかにするのが本論の目的である。

本論の各章の内容は以下の通りである。

第一章　「創作」としての妖怪　―馬琴作『化競丑満鐘』の笑い

民俗学者の従来の妖怪研究において、なぜ創作化物を排除したのか。柳田国男は文学作品に登場する妖怪を「近代の絵空事」と決めつけ、「困つたものが流行した」と述べている（「川童祭懐古」一九三六年」。本章では、柳田が事例として取り上げた曲亭馬琴作の読本浄瑠璃『化競丑満鐘』（寛政十二年〈一八〇〇〉刊）を詳細に分析し、その笑いの精神は当時の黄表紙に共通する部分が多いことを指摘する。柳田が否定した妖怪像は①滑稽化された妖怪、②怖くなくなった妖怪、③流行した妖怪、④個人の幻覚である妖怪、というようにまとめられるが、これらの要素のすべては、「創作」としての妖怪を示しているともいえる。特に、この四つの特徴は、江戸時代の笑いの文学と一致しているのである。以下の章は、柳田が否

定した「創作」としての妖怪（化物）に焦点を当て、その本質を探る試みである。

第二章　初期草双紙の化物尽くしの形成と展開

化物尽くし（いくつかの違う種類の化物が一緒に行動する趣向）の草双紙は赤本から始まるが、その後、黒本青本の中で大きく発展していく。本章では、初期草双紙の化物尽くしの作品をすべて詳細に分析し、その流れと特徴を確認する。

初期草双紙の化物尽くしの主な趣向は「化物退治談」「文芸作品に取材」「文芸作品の化物見立て」「異類合戦物」に分類できる。伝説化された豪傑による化物退治という趣向が多いが、この作品群を検討してみると、同じ話の焼き直しが一つもないことが分かる。その工夫として、豪傑の多様性、退治談と別の趣向の混合、退治談の滑稽化、新型の化物の登場などが挙げられる。さらに、新しい趣向への挑戦として、安永元年（一七七二）刊の富川房信による『化物親玉尽』『ぬゑのたんじやう』が挙げられる。『化物親玉尽』には、化物自身が新しい形の「化物」を作り出す工夫が見られ、『ぬゑのたんじやう』はお決まりの化物に新しい物語が与えられている。初期草双紙の化物尽くしの大半は房信によるものである。彼は化物談の伝統を維持しながらも、常に新しい工夫を凝らす姿勢を示しており、この工夫は黄表紙の笑いの前触れだともいえよう。

第三章　黄表紙の化物尽くしの変容

化物尽くしという趣向は黄表紙の当初の安永四年（一七七五）から終わりを告げる文化三年（一八〇六）まで、廃ることなく続いている。当世風の笑いを重んじる新しい文学形式の中で、化物尽くしはどのように発展していくのか。本章では、化物尽くしに該当する六十六点の作品を対象にして検討する。

黄表紙の時代になると、房信だけではなく、多くの戯作者の手による化物尽くしが世に出されていた。つまり、化物尽くしは黄表紙の中の一つの手頃のジャンルといえる。

黄表紙の化物尽くしは黒本青本の趣向をずっと受け継いでいるが、新たな趣向として、「箱根の先」「人間（大通）にかなわぬ化物」「大通を目指す化物」「人間世界の見立て」「遊廓を舞台にする化物の話」「怪談集」「化物図鑑」も挙げられる。化物は野暮に匹敵され、人を脅かすことなく大通を目指す話は黄表紙ならではの趣向である。従って、舞台は伝説の世界から当時の江戸に移る場合が多い。例えば、坂田金平は伝説上の豪傑としての面影が薄くなり、その代わりに、野暮ったい男または大通の男の代名詞になる。しかも、特定の文芸作

品の化物見立てというより、化物が人間の生活様式を真似る趣向（特に十返舎一九による化物尽くし）が多く見られ、化物尽くしがより分かりやすいものになっている。黄表紙の化物尽くしは子供の読者層を最後まで捨てなかったことから、板元の商業主義の側面が見えてくるのである。

第四章　化物尽くしの黄表紙と合成本をめぐって

本章では、黄表紙の化物尽くしの合成本を事例にして、板元の商業主義についてさらに検討する。独立した一つの黄表紙を別の黄表紙と組み合わせて新たに刊行したものを「合成本」というが、そもそも独立した二つの作品を合わせるだけで、一貫した作品が簡単にできるのだろうか。版元が、合成本を作る際、合理性を備えた作品にする工夫をしたことを証明するために、「『今昔化物親玉』『（化物）世櫃鉢木』の合成本」「『御存化物』『変化物春遊』の合成本」「『化物見越松』『信有奇怪会』の合成本」という三つの事例を詳細に検討する。事例の形式と内容はそれぞれ違うが、一貫性を持たせようとする工夫は共通している。版元にとっては、全く新しい作品を作る苦労と比べて、手間や費用がかからない便利な本作りである。また、読者にとっては、好きな話を新しい形で読むことができる。この現象は化物尽くしの安定した人気を語っているように思える

第五章　鬼娘の系譜　―化物と見世物

安永七年（一七七六）の夏に鬼娘（おにむすめ）と呼ばれた見世物が江戸の東両国広小路で流行した。本章では、実際の鬼娘の特徴を明らかにしながら、宣伝用の文学作品における鬼娘の姿、そしてその後の草双紙に見られる変容を辿る。見世物と化物との関連性についても考察する。

「因果者」とされる鬼娘の見世物は見慣れた鬼の容姿からかけ離れており、内容が大したものではない。それにもかかわらず、制作者は伝統的な鬼の要素と、当時の流行の要素を融合し、黄表紙の化物に匹敵できるような商品を作り上げていった。そして、この商品化された存在が変化しつつ、黄表紙の中に長く生き続けたのである。

第六章　所帯道具の化物の系譜　―化物と擬人化

本章では、所帯道具の化物に焦点を当て、化物と擬人化について考察する。黄表紙によく登場する異類と化物との境目は曖昧である。特に所帯道具の化物と異類との視覚的な違いは判断しにくい。実は草双紙の中で、「化物」は「異類」という意味で使われる場合が多い

ので、区別するのはややこしい作業である。所帯道具の擬人法を「器物の原型を崩さない方法」と「人間と合体する方法」に大別し、十返舎一九による絵を事例にしながら、「異類」としての所帯道具と「化物」としての所帯道具の表現を比較する。草双紙の作者と絵師は「擬人化」という手慣れた手法を使って、身近にある所帯道具に生命が込められているように描いている。この意外性は読者を笑わせる効果がある。本来怖いはずの化物は、親しみやすい愛嬌のある存在に作り直されており、化物の商品化に結び付けられるのである。

江戸の人にとって、民間伝承などに形成された化物は馴染深い存在であった。草双紙の作者と絵師は長年にわたり「創作化物」を商品として作り直していった。初期草双紙からすでに「古くさい」存在に決めつけられた化物たちは、早い段階から新しい姿を人間（読者）に見せなければならなかったが、だからこそ化物の話が書き続けられていったともいえる。本論では、創作化物の歴史を辿ることによって、草双紙そのものが持つ娯楽性と商業主義を明らかにしたのである。